

たくさん覚えるほどよい効果

幼児の漢字教育で、幼児があまりよく漢字を覚えるので、「こんなにできるようになって、小学校の漢字学習がつまらなくなりはないだろうか」と、心配されるお母さんや幼稚園の先生がよくいらっしやいます。

これもまた、老化した心で、若々しい心を推し量るところからくる見当違いです。

すでに述べましたように“若い”幼児の心は、くり返しを飽きるどころか歓迎します。それに、“できる”から楽しいのです。できて楽しいから、気に入った遊びに夢中になるように一生懸命にやります。一生懸命にやるからますます能力が向上します。

わたしは、小学校の一年生をたびたび指導していますが、漢字の書き方練習の時、わき目も振らずに書いているのは、必ず上手な子どもです。下手な子どもは、一字書いてはため息をつき、一字書いてはよそ見をしています。

うまく書ける子は、それほど一生懸命にやらなくてもよいと思うのに、一生懸命にやり、下手な子は、一生懸命にやってほしいと思うのに、一生懸命になれないのです。

成功の喜び、うまく書けたという喜びを知らない子どもには、それを求めて努力するだけの意欲が燃えないのです。下手だからこそ練習しなければいけない、ということがよくわかるわたしもおとなできえ、

やっぱり下手なことはついおっくうになるものです。

幼児も、漢字が得意になればなるほど、小学校へ行ったら、わかる楽しさから、なお一生懸命勉強します。できすぎによる心配など決してありません。

“できなくて困る” これこそほんとうに困った悩み、容易に救いがたい悩みです。

というのも、できない子は、いちばん励みになる成功の喜びというものを知りませんので、やる意欲が出ないからです。やっても楽しくないのです。意欲のないものが、なにをしても、楽しいはずも、うまくできるはずもありません。こうして悪循環が起こるのです。

悪循環はどこかで断ち切らなければなりません。そして、どこかが好転すれば、全体がうまくいくようになるのです。たとえば何かを褒められた、ということで“いい気持”になれた。そこで子どもに“やる気”が出た。そのため、いままでより良くできた。それがまた認められて褒められた。これで、良い循環軌道に乗ったわけですが、こうなれば、もうあとはどんどん向上線の一途をたどることになります。

たしかに、この図式どおりに軌道に乗せることは、実際にはなかなか容易ではありません。しかし、子どもの長所を見つけ出し、子どもの能力を引き出すことが“教育”だと考えるおとななら、やはりこの軌道に乗せる努力をしなければなりませんし、努力すれば必ず実りは期待できます。